

# 緑の風 FAX版



NO. 129 2019年 5月13日 JR東労組

J R 東労組ホームページ

## 《保育園児の 母親の声》

「自分が生まれて  
ずっと飛行場があっ  
たので、これが日常  
だと思っていた。で  
も米軍機の部品が子  
どもの保育園に落下  
し、私たちの生活す  
る環境が異常だと初  
めて気付いた」

**様々なモノ・現象などの存在を常に意識すること、大事なことが見えてくるのではないだろうか？**  
**連帯する多くの仲間と共に、安心して生活できる社会をつくり出していきましよう！**

### 日々論々

## 視点

政治部・山口哲人



沖縄の基地負担

## 「異常が日常」の体感

三十八歳にして、初めて沖縄を「体感」した。旅行などではなく、地元紙・琉球新報と東京新聞との記者交流で、初訪問がいきなり半年間の滞在となった。米軍普天間飛行場(宮野湾市)の移設に伴う名護市辺野古の新基地建設阻止を掲げる玉城デニー氏が県知事に就任した二〇一八年十月に、記者も着任した。

玉城氏が就任後程なく訪れたのは、普天間飛行場のそばの緑ヶ丘保育園と普天間第二小学校だった。「七年末、屋根や校庭に米軍機の部品が相次いで落下した場所だ。玉城氏と面会した保育園児の母親の一人は「自分が生まれてずっと飛行場があったので、これが日常だと思っていた。でも米軍機の部品が子どもの保育園に落下し、私たちの生活する環境が異常だと初めて

気が付いた」と声を震わせた。小学校の校長は、飛行場から米軍機が飛び立ったことを

沢通信基地(埼玉県)と航空自衛隊入間基地(同)、米軍横田基地(東京都)を結んだ三角形の真ん中の辺りだ。航空機が飛ぶこと、異常だと

うだったように、この異常を日常だと思わされている人がちがいない。異常に慣れさせられることの異常さ。そ

れは辺野古に移設しても同じ状況になり得る。日本政府は、住宅密集地に囲まれた普天間飛行場の危険性を除去する目的で辺野古移設の必要性を説く。だが危険なのは基地の存在以上に、基地から飛び立つ航空機の存在が大きいのではないかと、米軍は住宅街や教育施設、病院などの上空を飛ばないと約束し順守する。米軍機が落下した保育園も小学校も、米軍の飛行ルートではない。園長は米軍の飛行ルートが形骸化し、園上空も飛んでいると訴えている。

部品落下に限らず、米軍が引き起こすトラブルは日常茶飯事だ。訓練場での火災、軍用機の緊急着陸、戦闘機の墜落。銃を所持したまま米兵が街中に脱走した上、米軍が身柄を確保するまで日本側に知らせない事件もあった。東京で同じことが起きても、みな黙っているだろうか。沖縄の人たちだって、異常が日常になっている現状を決して許容しているわけではない。

県民がいら立っているのは米軍にだけではなく、こうしたことに無関心な本土の人間に対してだ。「わが事として沖縄の状況を捉えて」。玉城氏が代弁する県民の思いを胸に刻まなければならない。

5月13日 東京新聞

異常に慣れさせることの異常さが

沖縄では発生している